

『結婚差別から考える』～差別のない社会の実現に向けて～

2学期の人権・同和教育に関するホームルーム活動では、「結婚差別」について学びました。「結婚」に対する価値観はさまざまですが、「将来は好きな人と結婚して幸せな家庭を築きたい！」と考えている人は少なくないでしょう。



すべての人が幸せを追求する権利を持っていますし、結婚（婚姻）についても、本人の合意のみによって成立することは、日本国憲法にも明示してあります。

婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。【憲法第24条第1項】

しかし、その「幸せ」を「差別」によって奪われるとしたら…。結婚差別とは、本来自由であるはずの恋愛や結婚を、「生まれ」を理由にして反対することです。どこの生まれであるか、特に、その場所が近世の被差別部落にルーツがある場所であるかどうかは、本人に責任のあることではありません。しかしながら、今なお、結婚時における差別が根強く残っているのです。

感想より

- 2年生や1年生の時の授業で、昔、「被差別部落」というところに対して差別があったことは勉強していたけど、今も、結婚する時に差別的な目で見られたりして結婚できない人がいるのは、とても辛いことだと思いました。
- 今でも差別が無くなっていないことに驚きました。自分たちが悪いわけではないのに、被差別部落に生まれたことで、結婚が無くなったり、いじめの被害にあう事は間違っていると思いました。

授業では、被差別部落に生まれた女性が学生時代に書いた、「話してくれてありがとう」（裏面）という作文を読み、

- なぜ筆者の母は娘に「生まれのことを話さなければならない」と決心したのか。
- 自分が筆者なら、交際相手に自分の出身を告げるだろうか。
- 部落差別をなくすために必要なこととは何だろうか。

…などを一緒に考えてもらいました。特に2つめの「告げるかどうか」はさまざまな意見がありましたが、「生涯のパートナーならありのままを受け入れて欲しい」「隠し事をせずに交際したい」「一緒に差別に立ち向かって欲しい」という理由で「告げる」と答えた人がやや多かったように感じました。

人権についての学習は、「自分だったらどう思うか」「自分だったらどうするか」と、考えることから始まります。「深く考えていくうちに心が痛くなりました」、「自分もとても辛い気持ちになりました」と、感想を寄せてくれた人もありました。

さて、「自分は差別なんて気にしない」と言っても、もし、両親や兄弟、親族が猛烈に反対したとしたら…？ 結婚差別は、「反対されるなら結婚をやめよう」と、諦めたときに成立してしまいます。差別と闘うためにも、正しい知識が必要であることは、言うまでもありません。

部落差別の問題には「寝た子を起こすな」論と呼ばれる論争があります。「学校などで部落差別について学習するから人々の差別意識が消えない。差別は、寝た子を起こさぬように放っておけば、静かに、自然と消えていく」という考えです。実は、皆さんの感想のなかにも、「そもそもみんなが部落差別のことを知らなければ済むのではないか？」というものがありました。これに対して、あなたならどう答えますか？ 次の感想に、その解答があるように思います。

感想より

- 部落差別は、親から子へ受け継がれることで、差別がずっと続くということが分かりました。親がしっかりと差別について理解し、正しい考えを持つことで、子どもにもその正しさが受け継がれると思いました。
- 高校に入り、「部落差別」という言葉を知りました。現在でも差別を受けている人たちがいるということを知り、人権についてしっかり学んでいかなければいけないと思うようになりました。差別は、誰かから始まり、それが受け継がれてしまうと、次の時代・次の世代にも消えないものになってしまいます。人権教育を受けることで、部落差別などの問題が少しでも減っていけばいいなと思いました。そして、辛い思いをしている方々がいることを、多くの人に知ってもらう必要があると思います。全国民が平等に平和に暮らしていける世の中にしていかなければなりません。私自身も、次世代へ、差別のない世の中になるよう、伝えていきたいと思っています。

いかなる差別問題に対しても、「差別は許されない」という正しい認識をもち、これをなくしていくことが重要です。皆さんは、邇摩高校で、偏見や差別、人権に関するさまざまな学習を行ってきました。差別問題は、「正しい学びや行動」があれば、なくすことができます。卒業しても、どうか、高校での学びを忘れないで下さい。そして、自分を大切に、人を大切にして、正しく行動できる人であってください。

皆さんへの最後のエールになればと、講演会を企画しました。邇摩高校で、クラスメイトとともに学び合うことができる時間も残りわずか…。最後まで真摯に学ぶ皆さんの姿を楽しみにしています。

「人権・同和問題に関する講演会」

- 2月3日（水）2限（9：50～10：40）
- 講師：おおだふれあい会館 館長 石橋 義正 様
- 演題：「自分を大切に！人を大切に！」



*この便りは持ち帰り、保護者のかたと人権について話しあうきっかけにしてください。（人権・同和教育推進スタッフ 森脇）

【資料】

「話してくれてありがとう」（１）

人権・部落問題は、今もなお根強く残っているということを、これまでの授業を通じて改めてわかりました。現在、私には高校時代から付き合い2年になる彼がいます。

私が、自分が被差別部落の出身であることを知ったのは、ちょうど2年程前のことです。洗濯物をたたんでいるときに、母が私に言いました。「ねえ、部落差別とか聞いたことある？学校の道徳の授業のときとかに勉強したことがあると思うんだけど。」私は、「江戸時代に被差別身分の人たちが存在したこと、そして、明治時代以降、その身分がなくなったこと。しかし、それにもかかわらず、そのことで今もその人たちを差別している人たちがいるということを知った」と母に話しました。

そうすると、母は涙ぐみながら、私（の家族）が住んでいるこの土地（集落）が被差別部落であるということを説明してくれました。そして、自分も、以前結婚したいと思う人がいたが、部落差別により結婚できなかったことを話してくれました。

そして、それは母だけにとどまらず、私の2つ年上の姉にまでも影響しました。その彼と3年程お付き合いしていた姉は、その男性と結婚する約束をしていました。しかし、ある日その男性の家に遊びに行った際に、男性の母親から「どこ出身なの？」と尋ねられ、姉は自分の住んでいる土地（集落）の名を言いました。その瞬間に男性の母親の顔が急に変わった、と後に姉が言っていました。その後、男性は、姉が部落出身の人だからという理由で母親や親せき中から結婚を反対されました。一時は、「そんな大昔のことは関係ない。」と言っていた彼も、ついに結婚する意志をなくし、姉たちの交際は終わりました。姉が部落出身であると知った日から、男性の母親は電話の取次ぎをしなくなるほど、姉に対する嫌がらせをするようになりました。姉自身、男性の母親から出身を聞かれたときは、まだ自分が被差別部落の生まれであることを知りませんでした。彼の家での出来事を母に相談した際に初めて事実を知ったのです。そのときに姉が受けた傷は、あまりにも深すぎました。体調を崩し体重は激減し、私たち家族も見えない程でした。

このような姉の体験を私に語った母は、私に一言こう言いました。「自分が被差別部落の出身だということは、今後人に言う必要はないし、だからといって、下を向いて歩く必要もない。堂々と胸を張って生きればいい。」この言葉は私の心の中に強く残っています。

「話してくれてありがとう」（２）

母はあえて人に言う必要はないと言いましたが、私には、どうしても納得できませんでした。そこで私は、交際して2年になる彼に話をすることを決意しました。話す前は、本当に勇気が必要でした。これを言ってしまったら、母や姉のように結婚することもできなくなり、今の関係が壊れるかもしれないと思うと、悲しさのあまり涙が出てきました。そして、母が私に話したときのようにゆっくりと彼に話しました。泣きながら話す私の話を彼は黙って聞いていました。

私が話し終わると、彼は一言「『話してくれてありがとう。』でも本当は知っていたんだよ。」と言いました。彼の両親が、私たちが交際し始めの頃に彼に話したのだそうです。彼の両親は、彼が私とこれから付き合いの中で、私の住んでいる土地が被差別部落だということを知り、そのせいで別れたりするような心の狭い差別意識を持った人間にだけは育てほしくないと思い、彼に話したのだそうです。私は彼からその話を聞き、今度は嬉しくて涙があふれました。そして、人権や差別に対してきちんとした考えを持っている彼の両親に本当に感謝しました。

彼の両親が前もって彼にきちんとした人権教育をしていたからこそ、今のこの関係があるように思います。差別は繰り返されます。親から子へ受け継がれてしまうのです。だからこそ、私も将来自分の子どもが生まれたら、このような問題に直面する前に、しっかりと教育したいと思います。

世の中にもっともっと、人権・部落問題に対するきちんとした教育を受けた人たちが増えれば、部落問題はなくせると思います。そのためにも、小さい頃から中途半端ではなく、きちんとした人権教育が必要だと思います。私もこれからの問題に少しでも協力できるように、まずはしっかりと自分が勉強していこうと思っています。

（出典：宮崎県人権・同和教育研究協議会編『いきる（高校用）』一部改作）